

## 対人恐怖心性と認知的・投影的親子関係像

—— 内的ワーキングモデルの観点からの検討 ——

久保 恵<sup>1</sup>

本研究では、対人恐怖心性と親子関係像との関連を、内的ワーキングモデル(IWM)の観点から検討した。親子関係像については、内在化された体験に接近するため、認知レベルと投影レベルとから調べた。回答を得た大学生153名の中から、対人恐怖心性質問紙で対人恐怖心性の高い者(H群,40名)と低い者(L群,39名)とを抽出し、子どもの頃の親との関係認識質問紙と回想動的家族画法との結果を比較した。質問紙では、H群は母親に対して、親密さも強いが不信も強いという二重性を示した。父親に対しては、親密さ、不信、怯え全因子でH群はL群より否定的であった。家族画では、H群はL群より交流し難い両親像を描いた。以上より、対人恐怖心性が高いほど(1)親子関係像は肯定的なまとまりをもたない、(2)受容的な親の存在体験が希薄、との仮説が支持された。対人恐怖心性と親子関係像とに特有の関連が認められたことにより、対人恐怖心性高群を、不安定な親子関係像を基型とするIWMで捉える妥当性が示された。

キーワード：対人恐怖心性、親子関係像、愛着、内的ワーキングモデル、大学生

対人関係の受け止め方の個人差には、過去の経験的知識や期待が関与していると考えられる。Bowlby (1973 黒田・岡田・吉田訳,1977)の愛着理論によると、子どもは愛着対象との具体的な相互作用経験を通して、愛着対象の応答性と自己の主張の有効性についての主観的な確信・表象を相補的に形成する。これに基づいて、愛着対象との情報が内的にシミュレートされ、行動が導かれる。例えば、応答的な養育者との間には、養育者との関係を通して安心感を得る安定した愛着が形成されるが、養育者の応答に一貫性がない場合には、子どもは養育者にしがみつきながらも不安がおさまらないというアンビバレントな愛着を形成したり、養育者が応答的でない場合には、子どもは拒絶されて傷つかなないように自ら距離をとる回避的な愛着を形成する。Bowlby (1973 黒田・岡田・吉田訳,1977)はこのような個人特有の心的ルールの存在を仮定し、内的ワーキングモデル (Internal Working Models, 以下IWMと略) と呼んだ。そして、発達初期の経験の般化として内在化されたIWMは、その後のあらゆる時間、あらゆる関係への情報処理に、多くは意識外で作用すると考えた。

青年を対象としたIWMの実証的研究として、Hazan & Shaver (1987)は、乳児の愛着行動パターン

に対応させた成人の対人スタイル (安定,アンビバレント,回避)を分類する質問紙を作成し、対人スタイルの自己評定結果と、その個人の恋愛関係のあり方とに有意な関連を見出した。Hazan & Shaver (1987)に基づいた日本版質問紙が詫摩・戸田(1988)によって構成されており、久保田 (1995)は、この質問紙で測った対人スタイルと、過去から現在における母親との関係に関する認識とに特定の対応を見出した。例えば現在の対人スタイルでのアンビバレント特性は、子どもの頃の母親との関係認識の愛着因子と負の相関を示し、不信、過剰適応、分離不安因子とは正の相関を示した。このように、成人の対人スタイルは乳児の愛着行動パターンと対応させて捉え得ること、また対人関係認識のあり方は一般的な他者に対してと母親に対してとで関連することが認められ、個人に内在化された心的ルールとしてのIWMの働きが部分的に実証されてきた。

IWM理論の精緻化と実証を進めるためには、対人情報処理の個人差をより多面的に捉え、これと内在化された親子関係像との関連を検討することが必要と思われる。例えば我々が現実生活で経験する様々な対人不適応感には不安定なIWMの働きが考えられるのだが、これらを愛着不安定型であるアンビバレントあるいは回避への類型化という視点でのみ捉えることには限界がある。むしろ様々な対人不適応感がそれぞれどのような親子関係認識のあり方と関連するかを見出していくことにより、こうした不適応をIWMの視点で

<sup>1</sup> 旧、京都大学大学院教育学研究科  
現、四天王寺国際仏教大学  
〒583-8501 羽曳野市学園前3-2-1  
megkubo@mail.shitennoji.ac.jp

捉える有効性が明らかになると思われる。

そこで、本研究では、対人不適応感の1つとして対人恐怖心性を取り上げ、対人恐怖心性の高低と内在化された親子関係像との関連を検討することを目的とする。対人恐怖心性は、自我確立という発達課題を抱え、自己意識を高めながら対人世界を広げる青年期には、一般の健康者においても潜在的、一過的に有する者も多いと考えられている心性である(笠原, 1972; 小川, 1974)。これは、対人場面での緊張や不安に悩む葛藤状態であるが、客観的事実の反映というよりは主観的な対人情報処理結果が多分に作用している状態と考えられる。つまり対人恐怖心性には、不安定な愛着関係を基型とするIWMの働きが想定できる。

対人恐怖の症状形成と親子関係については従来以下のように論じられてきた。まず、土居(1971)は“甘え”理論から、人は最初の人見知りを経験した後、自我を次第に成長させ、より広い人間関係に入っていけるのだが、発達の初期に何らかの理由で母親とよい関係をもつことができず、このような人見知り学習をなかなか卒業できず、対人恐怖を発するようになる」と述べている。また大橋(1983)は、青年期に世間(ウチとソトとの中間領域)の構築ができずに、ウチとソトとに分極化された世界の中で身動きがとれずにいるのが対人恐怖症者であるが、その原因は、彼らが乳児期にウチなる母親に甘えながらソトなる父親に馴染むといったウチとソトとの往復運動を修得できなかったからだ」と述べている。

これらは臨床場面からの理論である。実証研究では縦断的な時間軸ではなく、いずれも現時点での対人恐怖心性と親子関係との関連が扱われている。木村(1983)は、TATにより、対人恐怖心性高群には図版6 BM(母—息子カード)で自立のテーマが少なく父の死のテーマが多いという結果を得て、これを母からの分離不安や父の機能の不在と解釈した。松井(1990)は、対人恐怖傾向と自他認知体系との関連を対人認知尺度への評定結果から調べ、対人恐怖傾向の高群は現実自己と理想自己との隔たりが大きく、両自己は他者表象(父親・母親など)ともかけ離れており、自己と同一視しうる適切な内的対象がいないと考察している。

こうした結果は、対人恐怖心性高群に特徴的な両親像を認めたものである。本研究ではさらに両親との関係性、とりわけ内在化された親子関係像に焦点づけた検討を行うことにより、対人恐怖心性をIWMの視点で捉える有効性を考察する。対人恐怖についての従来の知見を愛着理論で捉えると以下のように考えられる。

まず、土居(1971)が述べた“甘えたくても甘えられない”親子関係像とは、単に否定的な側面のみではなく、葛藤を含むものと思われる。また、大橋(1983)の“ウチなる母親に甘えながらソトに馴染むというウチとソトとの往復運動が不十分”といった特徴は、探索活動のための安心基地として愛着対象が機能していない状態と考えられる。安心基地とは、愛着対象が側にいる、必要な時には接近できるという確信であり、新奇な対象と出会う探索への飛躍台となる(Bowlby, 1988)。ソトなる対人世界の広がりには困難を示す対人恐怖心性高群の親子関係像からは、安心基地としての意味あいは伺いにくいと予測できる。

具体的な仮説として次の2点を考えた。つまり、  
(1)対人恐怖心性が高いほど、親子関係像は肯定的なまとまりをもたないであろう。  
(2)対人恐怖心性が高いほど、受容的な親の存在体験は希薄であろう。

このように、内在化された愛着体験に接近するためには、直接意識報告を求めるだけでは不十分であり、投影的方法による心理力動面の理解を加える必要がある。本研究では、親子関係像を、意識報告による認知レベル、描画法による投影レベル、の二側面から検討することにした。認知的親子関係像に関しては、久保田(1995)が作成した子どもの頃を想起した母親との関係認識尺度を基として、対人恐怖については父親との問題がしばしば論じられるところから、父親との関係も含めた尺度を用いる。投影的親子関係像に関しては動的家族画(Burns & Kaufman, 1972 加藤・伊倉・久保訳, 1975)を用いる。動的家族画とは、家族画に動的教示を加えることで、被験者自身が捉えた家族成員間の相互作用や家族内の心的位置、またそこに伴う感情体験が伺えると考えられているものである。本研究では、さらに子どもの頃の家族を回想して自由に描かせる教示を加えた。これにより、子どもの頃の日常的な家族体験の中から視覚的に具象化される親との関係を検討できると考えた。また、家族画を加えることで、母親、父親と対象を特定せずに家族全体が描かれた日常場面から親との関係の体験像が伺えること、被験者にも関係性という問題意識を直接焦点化させずに自然な関係性を伺えること、といった課題の広がりを狙いとした。

## 方 法

### 課題

**対人恐怖心性尺度** 小川(1974)が対人恐怖症者の悩みから尺度化した対人不安質問票より、木村(1983)が

対人恐怖に特徴的で正常者にも適合する項目を予備調査で選択し作成した尺度。“人と自然につきあえない”，“他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる”といった28項目の対人恐怖心性項目に、測定の焦点を緩和するための緩衝項目22項目（“昔はよかったと思うことがある”など）、虚構項目10項目（“時々人のうわきをする”など）を加えた合計60項目からなり、7段階（0：全くあてはまらない～6：非常にあてはまる）で評定を求めた。

なお、木村（1983）はこれを対人不安質問紙と呼んでいたが、“対人場面において自己と他者が気になり、緊張と不安を生じるという点で、漠然とした不安とは異なる”とし、この質問紙で測定した結果を対人恐怖心性として論じている。日本では対人不安と対人恐怖とがほぼ同質に捉えられていると永井（1994）も述べているが、本来、不安と恐怖とは別概念である。質問紙の項目は対人場面と対象が限定されており、漠然とした不安ではなく、具体的対象を前提とした恐怖を測定するものと考えられる。そこで、本研究ではこの質問紙を対人恐怖心性尺度と定義しなおすことにした。

**過去の母親・父親との関係認識尺度** 久保田（1995）は、親子関係についての大学生の自由記述資料に基づいて、子どもの頃を想起した場合の母親との関係についての感情傾向・認識を表わす叙述文29項目（“母親が好きだった”，“母親は嘘つきだと思った”など）を尺度化した。これは主に感情面を表わす叙述文からなっている。愛着は対象への接近という形で具現化されやすいと考え、今回新たに、愛着行動として親への接近を表わす3項目（“気が動転した時、慰めてもらうためにすぐに母親のところに行った”など）を加えて32項目とし、父親に対しても同様の32項目、合計64項目について、6段階（1：全くあてはまらない～6：非常にあてはまる）で評定を求めた。

**回想動的家族画法** “あなたが小さい頃のあなたの家族を、あなた自身も含めて何かやっているところを描いてください”との教示を与え、B5版描画用紙にHBまたはBの黒鉛筆で自由に描く課題を提示した。表紙に家族構成と絵の説明の記入を求めた。

#### 被験者と手続き

対人恐怖心性尺度、過去の母親・父親との関係認識尺度、回想動的家族画法の順に綴じた質問紙を、1992年10月、大学生250名に一齐に配布し、郵送により回収した。153名（男71名、女82名）から回答を得た（回収率61.2%）。年齢は18～23歳（平均20.4歳、SD1.49）であった。ただし、家族画については、回収されたもののうち42名が未回答であったため、家族画に関する被験者は111

名になる。

## 結 果

### 対人恐怖心性の高・低群の抽出

対人恐怖心性尺度28項目について因子分析（主因子法）を行ったところ、固有値の推移状況から1次元的尺度であると示唆された。第1因子への負荷量は全項目とも0.4以上であり、 $\alpha$ 係数は0.94であった（TABLE 1）。以上よりこの尺度は対人恐怖心性の高低を表わす1次元的な構造をもつと考え、28項目の合成得点を対人恐怖心性得点とした（得点可能範囲は0～168）。対人恐怖心性得点はほぼ正規分布をなしており、平均74.5（SD27.0）、性差が認められなかったため、木村（1983）にならい、得点の上位、下位25%ずつを対人恐怖心性の高群40名（男21名、女19名、以下H群とする）、低群39名（男

TABLE 1 対人恐怖心性尺度の項目と因子負荷量

項目内容	因子負荷量
A 5 <sup>a)</sup> 人と自然につきあえない	.78
A 7 人との接触がうまくゆかない	.78
A 2 人との交際が苦手である	.76
A 9 対人関係がごちない	.73
A 4 人とのようにつきあつたらよいかわからない	.72
A 6 集団の中に溶け込めない	.72
A12 多人数の雰囲気になかなか溶け込めない	.72
B 6 他人が自分をどのように思っているのか、とても不安になる	.68
A 8 人前にでるとオドオドしてしまう	.67
A14 すぐ自分だけが取り残されるような気持ちになる	.67
B 4 自分が人にどう見られているのかよく考えてしまう	.67
A11 人が多勢いると、うまく会話の中に入ってゆけない	.66
A10 多勢の人がいると自分が圧倒されてしまうような感じがする	.65
A 3 グループでのつきあいが苦手	.62
B 3 そばに人が来ると、落ち着かない	.62
B12 自分が不愉快な感じを相手に与えているように思ってしまう	.62
A 1 人がたくさんいる所では気はずかしくて話せない	.61
B13 自分が相手の人によくない感じを与えているように思ってしまう	.60
A13 グループの雰囲気になじめず、違和感を感じてしまう	.59
B 2 職場、学校のクラス、近所の人に、自分がどのように思われているのか気になる	.59
B10 相手にいやな感じを与えるような気がして相手の顔をうかがってしまう	.59
B 9 人と話していて自分のせいで座がしらけたように感じることもある	.58
B 7 人と会う時に、自分がその人にどんなふうに見られているのか気になる	.51
B 8 人と会う時に、自分の顔つきや目つきがその人に悪い印象を与えるのではないかと不安になるときがある	.50
B11 自分の弱点や欠点を人に知られるのがこわい	.49
B 1 人から批評されたり、小言を言われたりすると非常に気分を害される	.46
B 5 顔をジッと見られるのがつらい	.45
B14 人と目が合う時、自分の目つきが気になる	.43
2乗和	11.07
寄与率 (%)	39.54

<sup>a)</sup> 項目番号のA、Bは、木村（1983）が意図した下位概念「A：対人場面での緊張感、不安感」「B：自他の意識の過剰」を表わすものであるが、因子分析の結果、A、Bともに対人恐怖心性の高低を測定する1次元的尺度であることが示された。

18名、女21名、以下L群とする)として抽出し、以下の分析対象とした。両群の対人恐怖心性得点は、H群が平均106.9 (SD15.1)、L群が平均41.5 (SD14.2)であった。

なお、虚構得点(得点可能範囲は0~60)は、被験者全体での平均が35.7(SD7.31)、最高得点は53、最低得点は18であった。虚構得点の低さは検査に対する構えなど回答の妥当性の低さを意味する。本研究では、最低でも得点可能範囲の3割以上、被験者の96.2%が得点可能範囲の4割以上の得点を示したことにより、全体として妥当な態度での回答が得られたと考えられる(MMPIでは、15項目中10項目を越えて“いいえ”と回答した者は妥当性が疑わしいとされている)。また、虚構得点について、H群は平均34.8 (SD8.42)、L群は平均35.7 (SD7.65)であり、両群での有意差は認められなかったことにより、検査に対する構えには差がないといえる。

### 親子関係像の認知的分析

**関係認識尺度項目の因子分析** まず、過去の母親との関係認識32項目について、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行い、固有値の推移状況と回転

TABLE 2 過去の母親との関係認識尺度項目と因子分析結果 (Varimax 回転後)

項目内容	I	II	h <sup>2</sup>
I 母親との親密さ ( $\alpha=.92$ )			
31 母親のそばにいるのが好きだった。	.85	-.15	.74
8 母親が好きだった。	.78	-.33	.72
30 気が動転したときは、慰めてもらうためにすぐに母親のところに行った。	.77	.03	.60
24 母親が喜んでいて自分も嬉しくなった。	.77	-.17	.63
19 母親の言うことは正しいと思った。	.73	-.17	.56
11 母親とは温かい愛情関係にあった。	.72	-.46	.74
32 母親と一緒にたくさんのことをした。	.72	-.15	.54
20 母親が困っていると手助けしたいと思った。	.68	-.19	.50
7 母親に死なれたらどうしようかと思った。	.66	.07	.44
6 母親には嘘がつけなかった。	.65	.03	.42
10 母親から期待されていると幸福であった。	.63	-.16	.42
4 母親は何でも聞いてくれると信じていた。	.60	-.03	.36
2 自分を守ってくれるのは母親だけだと感じていた。	.52	.17	.30
II 母親への不信 ( $\alpha=.82$ )			
14 母親は嘘つきだと思った。	-.14	.73	.55
23 本当の母親ではないのでは、と思った。	-.12	.68	.47
17 母親はずるいと思った。	-.23	.67	.49
5 母親は私に関心を示さなかった。	-.40	.56	.48
29 母親は子どもが好きではなかった。	-.15	.56	.33
21 友の母親をうらやましいと思った。	-.21	.54	.33
22 幼稚園、保育園に行くということは、母親に家から追い出される感じだった。	-.01	.51	.27
9 叱られるたびに母親に捨てられる恐怖を感じた。	.16	.51	.28
1 母親がこわかった。	-.12	.49	.25
16 母親から叱られると何も手につかなくなった。	.36	.49	.37
18 何かをするときは母親の顔をうかがった。	.33	.48	.34
2乗和	7.04	4.11	
寄与率(%)	29.33	17.13	46.46

後の解釈可能性から2因子を抽出した。因子負荷量が小さい項目、複数の因子に大きく負荷する項目を除外し、再度因子分析を行った。その結果をTABLE 2に示す。各因子はそれぞれ高く負荷している項目内容から“I 母親との親密さ”“II 母親への不信”と解釈した。次に、過去の父親との関係認識32項目についても同様の因子分析を行い、“I 父親との親密さ”“II 父親への不信”“III 父親への怯え”の3因子を抽出した (TABLE 3)。母親との関係認識は、“母親のそばにいるのが好きだった”など親密さを表わす肯定的な認識と、“母親は嘘つきだと思った”など不信を表わす否定的な認識との2次元的な構造を示した。父親との関係認識は、否定的な認識が、“父親は嘘つきだと思った”などの不信と“何かをする時は父親の顔をうかがった”などの怯えとから構成され、“父親のそばにいるのが好きだった”など親密さを表わす肯定的な認識と合わせて、3次元的な構造を示した。久保田(1995)が抽出した、過去の母親との関係認識の愛着、不信、過剰適応、分離不安の4因子と比較すると、母親については、愛着と

TABLE 3 過去の父親との関係認識尺度項目と因子分析結果 (Varimax 回転後)

項目内容	I	II	III	h <sup>2</sup>
I 父親との親密さ ( $\alpha=.89$ )				
31 父親のそばにいるのが好きだった。	.85	.13	.07	.74
11 父親とは温かい愛情関係にあった。	.83	.25	.03	.75
32 父親と一緒にたくさんのことをした。	.74	.16	.02	.57
8 父親が好きだった。	.73	.41	.05	.71
30 気が動転したときは、慰めてもらうためにすぐに父親のところに行った。	.71	.34	.07	.63
4 父親は何でも聞いてくれると信じていた。	.67	.04	.14	.47
10 父親から期待されていることが幸福であった。	.64	.14	.27	.50
20 父親が困っていると手助けしたいと思った。	.58	.19	.30	.46
29 父親は子どもが好きではなかった。	-.58	.33	.24	.51
5 父親は私に関心を示さなかった。	-.59	.34	.18	.49
25 父親から離れていたいと思った。	-.60	.25	.31	.52
II 父親への不信 ( $\alpha=.72$ )				
14 父親は嘘つきだと思った。	-.17	.77	.07	.63
17 父親はずるいと思った。	-.30	.69	.08	.58
22 幼稚園、保育園に行くということは、父親に家から追い出される感じだった。	.04	.60	.05	.36
23 本当の父親ではないのでは、と思った。	-.05	.59	.17	.38
15 父親から「冷たい子」と言われショックだった。	.08	.47	.14	.25
27 父親はずるいと思った。	-.30	.42	-.03	.27
19 父親の言うことは正しいと思った。	.42	-.50	.33	.53
III 父親への怯え ( $\alpha=.70$ )				
18 何かをするときは父親の顔をうかがった。	-.02	.18	.78	.64
16 父親から叱られると何も手につかなくなった。	-.13	.03	.65	.43
12 父親が私に失望することが恐かった。	.09	-.05	.64	.42
1 父親がこわかった。	-.29	.19	.56	.43
3 父親の気を引くために「良い子」になろうとした。	.34	.22	.54	.45
28 父親は礼儀に厳しかった。	.14	.07	.50	.27
2乗和	5.87	3.30	2.83	
寄与率(%)	24.46	13.75	11.79	50.00

不信に対応する因子が抽出され、父親については、愛着、不信、過剰適応に対応する因子が抽出された。久保田で分離不安と解釈された因子は本研究では抽出されなかった。因子名については、本研究では“愛着”を安定から不安定まで含めた概念としているため、愛着の肯定的な側面から構成される第1因子を“親密さ”と呼ぶことにした。また過剰適応と解釈された因子は本研究では因子項目から考えて怯えと解釈できるものであった。

**対人恐怖心性と認知的親子関係像** 母親、父親それぞれとの関係認識の各因子について、2(性;男,女)×2(対人恐怖心性;H群,L群)の2要因分散分析を行った(各因子について、要因ごとの平均と標準偏差とをTABLE 4に示す)。その結果、母親との親密さ以外ではすべて対人恐怖心性の主効果が有意であった(母親との親密さ,不信,父親との親密さ,不信,怯えの順に, $F(1,78)=0.09, n.s.$ ;  $F(1,78)=10.57, p<.01$ ;  $F(1,78)=8.99, p<.01$ ;  $F(1,78)=16.72, p<.001$ ;  $F(1,78)=6.29, p<.05$ )。つまり、H群は母親との関係認識において、L群と同程度の親密さを示しながら、不信はL群より高いという二重性を示した。父親との関係認識は、H群はL群よりすべて否定的であった。性の主効果、交互作用は認められなかった。

TABLE 4 性別、対人恐怖心性高低群の、母親・父親との関係認識各因子の平均(SD)

	男性		女性	
	H群	L群	H群	L群
母親との親密さ	49.52(10.37)	50.72(13.97)	53.89(11.92)	54.48(14.60)
母親への不信	26.95( 9.55)	20.89( 5.97)	29.47( 9.51)	23.05( 8.34)
父親との親密さ	38.81(10.46)	47.83( 5.89)	39.74(10.42)	42.95( 8.15)
父親への不信	16.29( 4.45)	12.44( 3.52)	17.05( 6.31)	12.38( 3.73)
父親への怯え	20.95( 3.31)	18.00( 5.89)	20.11( 4.29)	17.29( 6.28)

### 親子関係像の投影的分析

**基準の作成と評定** 回想動的家族画法についての分析は、日比(1986)を参考に形式面(人物像の大きさ,人物間距離,人物像の向き,自己像に対する母親・父親の向き)と内容面(様式,人物像の行為)から行った。それぞれの評定基準と解釈の視点は以下の通りである。

まず形式分析の“人物像の大きさ”(各人物像について頭先の先から足の先までの最短直線距離。座位による脚部の屈曲などは考慮しない。)には、当該人物への関心の強さ、心的構えなどが投影されやすいと考えられる。従来の家族画では実際の身長が反映されやすいが、動的要因を加味した動的家族画では合理的防衛がなされにくいためである。“人物間距離”(両眼の中心を原点として測定。横顔の人物は眼を、背面は頭部の中心を原点とする。)には、当該人

物との間の親密性や感情的離反度が表われる。“人物像の向き”(各人物像を正面・横顔・背面に分類。)は、顔の向きが正面>横>背面の順に当該人物への肯定的な感情と関連する(以上,日比,1986の解釈)。さらに、“自己像に対する母親・父親の向き”(自己像からみた母親・父親像の向きを対面・横位置・平行・反対・隔離に分類。)も評定する。人物間の交流は、対面>横位置>平行>反対>隔離の順になされやすいと考えられる。特に相互交渉が可能であるのは、対面ないし横位置の時と考え、“対面・横位置”,“それ以外”で分類し検討する。

次に、内容分析の“様式”とは、人物像間の接近・離反を強調したり隠蔽したりするために、意識的・無意識的に示される描画の特徴である(日比,1986)。本研究では,Burns & Kaufman(1972 加藤・伊倉・久保訳,1975)が分類した7つの様式特徴の中から、特に関係性に関わる心的構えを反映するものとして、“区分(自己と他家族員との遮断,孤立や逃避の表われ)”と“包囲(感情的に当該人物を閉じ込める様式)”の出現頻度を評定する。“人物像の行為”については、各人物像の行為をカテゴリー(食事,テレビなど)に分類する。行為には、被験者の捉えた家族成員の対人態度や全体としての家族力動が投影される(日比,1986)。本研究では内在化された親子関係像を検討することが目的であるため、親子間の日常的な交流の有無を着眼点とする。そこで、両親像の行為については、自己像との交流場面か非交流場面かで上位分類する。すなわち、“交流”とは、食事、会話、遊びといったコミュニケーションがなされている場面である。テレビ場面は、各人物がテレビに注目しており、直接的交流がなされにくい状況と思われた。そこで、テレビ、新聞、仕事といった場面を“非交流”とした。

H群、L群について、家族画のデータがあるそれぞれ30名(男16名,女14名)、25名(男12名,女13名)を分析対象とした。分析にあたっては、両親との関係像を検討する目的で、描かれた家族成員のうち、母親、父親、自己の3人物像に注目して評定を行った。母親像あるいは父親像が描かれていない場合があったが、分析対象者の実際の家族構成欄には両親ともが記載されていたため、描画中の不在として扱った。また、H群男性の1名は、描かれた各人物像と家族成員との対応を判明できなかったため形式分析から除外した。内容分析については、筆者と心理学専攻の大学院生1名とで独立して評定を行い、評定者間一致率を求めたところ、区分・包囲については90.9%、行為については97.3%であった。不一致であったものについては合議に基づく再評定を行った。

以上の手続きにより評定した結果について、対人恐怖心性高低群間での差を $\chi^2$ 検定で調べた。また、男性のみ、女性のみで同様に $\chi^2$ 検定を行った。

**形式分析** 対人恐怖心性高低群間で有意差が認められた結果をTABLE 5に示す。

1. 人物像の大きさ：子どもの頃の家族を描いた絵であるため、自己像は最小に描かれることが一般的と予測できるのだが、H群はL群より自己像を最小に描くことが少なかった( $\chi^2(1, N=54)=3.83, p<.05$ )。これは、対人恐怖心性に悩むH群の自己へのとらわれや関心の強さを表わす結果と思われる。男女別の分析では男性のみに有意差が認められ、H群男性はL群男性より自己像を最小に描くことが少なかった( $\chi^2(1, N=27)=4.32, p<.05$ )。

**TABLE 5** 回想動的家族画法形式分析について、対人恐怖心性高低群間で有意差が認められた結果の比較 人数 (%)

	全 体		男 性		女 性	
	H群 N=29 <sup>a)</sup>	L群 25	H群 15 <sup>a)</sup>	L群 12	H群 14	L群 13
人物像の大きさについて						
<自己像>						
最小	12(41.4)	17(68.0)	4(26.6)	8(66.6)	8(57.1)	9(69.2)
最大・2番目	17(58.6)	8(32.0)*	11(73.4)	4(33.4)*	6(42.9)	4(30.8)
人物像の向きについて						
<母親像>						
正面	16(55.2)	17(68.0)	5(33.3)	9(75.0)	11(78.6)	8(61.5)
横・背面・不在	13(44.8)	8(32.0)	10(66.6)	3(25.0)*	3(21.4)	5(38.5)
自己像に対する母親像の向きについて						
<母親像>						
対面・横位置	10(34.5)	15(60.0)	7(46.7)	7(58.3)	3(21.4)	8(61.5)
平行・反対・隔離・不在	19(66.5)	10(40.0)	8(53.3)	5(41.7)	11(78.6)	5(38.5)*

注)\* $p<.05$  ( $\chi^2$ 検定)

<sup>a)</sup> H群男性の1名は、描画中の各人物の判明が不可能であったため形式分析から除外した。

2. 人物像の向き：男性のみに有意差が認められ、H群男性はL群男性より、母親像の正面向きが有意に少なかった( $\chi^2(1, N=27)=4.64, p<.05$ )。

3. 自己像に対する母親像の向き：女性のみに有意差が認められ、H群女性はL群女性より、母親像の向きを対面・横位置に描くことが少なかった( $\chi^2(1, N=27)=4.49, p<.05$ )。

以上より、自己へのとらわれの強さといった悩みのあり方はH群、特にH群男性に認められることが示された。親子関係像についての有意差は、男女ともに母親に対して認められ、H群男性は母親を横顔や背面に描くという表現で、H群女性は母親を自己像とは交流しがたい位置に描くという表現で、それぞれ不安定な関係像を示していた。

なお、“人物間距離”については、対人恐怖心性高低群間での有意差が認められなかった。距離は描画用紙

によって制限をうける基準でもあり、H群は家族との心理的離反度を、直接的な人物像間の距離においてではなく、区分や包囲として表わしたとも考えられる。

### 内容分析

1. 区分・包囲 (TABLE 6)：H群にL群より多く出現した( $\chi^2(1, N=55)=7.67, p<.01$ )。男女別の分析では、H群男性の出現率が有意に高かった( $\chi^2(1, N=28)=4.50, p<.05$ )。実際の描画では、意識的に人物間を区切る線が引かれていたものもあったが(資料 例1参照)、ほとんどは、こたつや車、浮き輪などで壁に相当するものが描かれていた(資料 例2参照)。

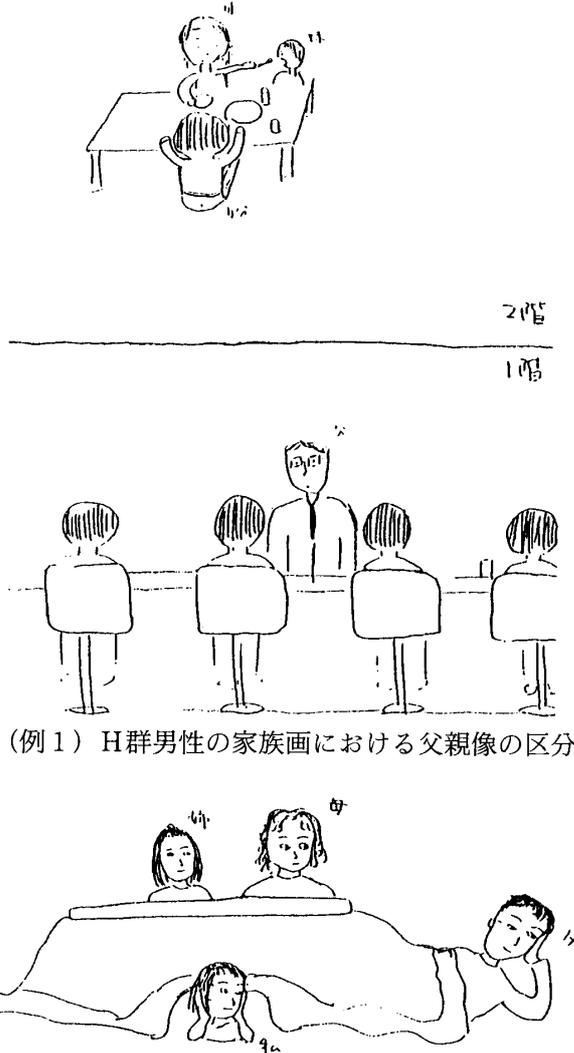
**TABLE 6** 区分・包囲の出現について、性別、対人恐怖心性高低群間の比較 人数 (%)

	全 体		男 性		女 性	
	H群 N=30	L群 25	H群 16	L群 12	H群 14	L群 13
区分・包囲有り	14(46.7)	3(12.0)	9(56.2)	2(16.7)	9(35.7)	1(7.7)
無し	16(53.5)	22(88.0)**	7(43.8)	10(83.3)*	5(64.3)	12(92.3)

注)\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$  ( $\chi^2$ 検定)

2. 人物像の行為：(a)自己像の行為 (TABLE 7)：過去の日常的な家族体験を具象化するにあたり、どのような場面を選び、どのような行為を思い描いたかということは、内在化された親子関係像の個人差を検討する上で重要な視点と思われる。分析対象者全体では、家庭での日常的な場面を描いた者と、家族での外出といった行事場面を描いた者が多数をしめた。家庭状況と戸外状況との分類を比較すると、対人恐怖心性高低群間で有意差は認められなかった。行為の内容について比較すると、L群はH群より、家庭あるいは戸外で“食事”“弁当”の場面を描くことが有意に多かった(“食事・弁当”と“それ以外”とに2分して $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $\chi^2(1, N=55)=7.33, p<.01$ )。幼い頃を回想した家族での食事場面には、身体的にも情緒的にも被養育的な体験が象徴されていると思われる。H群の食事場面には、父親が仕事として区分され、母子のみが家庭で食事している状況(資料 例1参照)も含まれていたが、L群はいずれも家族そろっての食事状況を描いていた。食事とは日々繰り返される場面であるからこそ、それが温かい交流の場として内在化されていることは、安定した親子関係像の特徴であると考えられる。(b)両親像の行為 (TABLE 8)：母親像、父親像いずれの行為においても、H群にはL群より非交流が多く認められた(順に、 $\chi^2(1, N=55)=4.10, p<.05$ ;  $\chi^2(1, N=55)=5.12, p<.05$ )。H群の親子関係像には、交流体験がL群より表現されにくいという結果が示された。

資料, 「区分・包囲」の典型例



(例1) H群男性の家族画における父親像の区分

(例2) H群女性の家族画における自己像の包囲

TABLE 7 自己像の行為について, 性別, 対人恐怖心性高低群間の比較 人数 (%)

	全体		男性		女性	
	H群 N=30	L群 25	H群 16	L群 12	H群 14	L群 13
<家庭>						
会話, ゲーム, 庭遊び	8(26.7)	10(40.0)	5(31.3)	4(33.3)	3(21.4)	5(46.2)
食事	2(6.7)	6(24.0)	1(6.3)	3(25.0)	1(7.1)	3(23.1)
テレビ	3(10.0)	1(4.0)	0(0.0)	1(8.3)	3(21.4)	0(0.0)
勉強, 手伝い	2(6.7)	0(0.0)	1(6.3)	0(0.0)	1(7.1)	0(0.0)
1人で座っている	2(6.7)	0(0.0)	1(6.3)	0(0.0)	1(7.1)	0(0.0)
<戸外>						
行楽地での遊び	10(33.3)	4(16.0)	5(31.3)	2(16.7)	5(35.7)	2(15.4)
弁当	0(0.0)	3(12.0)	0(0.0)	2(16.7)	0(0.0)	1(7.7)
車, 飛行機	3(10.0)	1(4.0)	3(18.8)	0(0.0)	0(0.0)	1(7.7)

考 察

親子関係像の肯定性, 否定性について

対人恐怖心性H群の親子関係像には以下の特徴が認

TABLE 8 両親像の行為 (上位分類) について, 性別, 対人恐怖心性高低群間の比較 人数 (%)

	全体		男性		女性	
	H群 N=30	L群 25	H群 16	L群 12	H群 14	L群 13
母親像の行為						
交流	21(70.0)	21(84.0)	11(68.8)	10(83.3)	10(71.5)	11(84.6)
非交流	7(23.3)	1(4.0)*	3(18.8)	1(8.3)	4(28.6)	0(0.0)
描かれていない	2(6.7)	3(12.0)	2(12.5)	1(8.3)	0(0.0)	2(15.4)
父親像の行為						
交流	21(70.0)	22(88.0)	13(81.3)	12(100.0)	8(57.1)	10(77.0)
非交流	8(26.7)	1(4.0)*	3(28.8)	0(0.0)	5(35.7)	1(7.7)
描かれていない	2(3.3)	2(8.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(7.1)	2(15.4)

注) 当該行為とそれ以外に2分して, HL間での $\chi^2$ 検定を行った結果, \* $p < .05$

められた。まず, 母親との関係について, 認知的親子関係像では, H群はL群と同程度強い親密さを感じながら, 同時にL群より強い不信を感じるという両面的な認識を示した。“好きだったけど信じられなかった”との対立葛藤は, 従来対人恐怖について述べられている二重性と一致する結果である。投影的親子関係像では, 交流し難さを示す結果が有意に多く認められた。つまり, H群男性は母親を正面向きに描くことが少なく, H群女性は自己像に対する母親を対面や横位置に描くことが少なかった。母親像の行為は, H群はL群より非交流が多かった。対人恐怖心性高群の母親像には, 意識的には親密さを感じながら, 意識的, 無意識的な次元で否定的な関係像が表出されることが示された。また父親との関係について, 認知的親子関係像では, H群はL群より親密さが低く, 不信, 怯えは高いといった一貫して否定的な認識が示された。投影的親子関係像では, 母親像ほど多くの指標で対人恐怖心性の高低による差異が認められなかったが, H群が描いた父親像の行為には非交流が多かった。対人恐怖心性高群の父親像は, 母親像より, 投影的な次元よりも認知的な次元で明確に否定的な関係像が表出されたといえる。

投影的親子関係像における対人恐怖心性高低群間の差のあり方にいくつかの性差が認められたが, 関連の方向は類似していたといえる。性差についての詳細な検討は今後の課題としたい。また, 母親像と父親像との違いについては後ほど考察する。以上のように, 対人恐怖心性が高いほど親子関係像は肯定的なまとまりをもたないだろうとの仮説(1)は支持された。

受容的な親の存在体験について

対人恐怖心性が高いほど, 受容的な親の存在体験は希薄であろうとの仮説(2)は, 以下の結果から確認できた。つまり, 対人恐怖心性に特徴的であった, 母親,

父親への不信、怯えや交流し難さといった親子関係像は、愛着対象との関係を通して安心を得る受容的な体験の希薄さを意味すると考えられる。大橋(1983)が述べた“ウチなる母親に甘えながら、ソトなる父親に馴染めない”対人恐怖症者とは、愛着理論に置き換えると、主要な愛着対象である母親を安心基地としながら、父親との関係を育む段階でのつまづきと考えられる。H群の母親像が否定的な特徴のみではなく二重性を示したことにより、母親は身近な存在でありながら自立的な探索を促す安心基地とはなりえていないと考えられる。愛着理論では、父親は必ずしも母親との愛着を土台とする二次的な愛着対象とは考えられていない(繁多, 1987)。母親が主要な養育者となることが多い育児状況では、子どもは母親との間に主要な愛着を形成するであろうが、例えば母親が応答的でない場合でも、父親が充分応答的であれば、父親との間に主要な安定した愛着を形成すると考えられる。しかし、本研究では、H群の父親像には母親像とは違った特徴での否定的な結果が認められた。H群の母親像が質問紙で両面的な認識を示し、家族画では複数の指標で否定的な特徴を示したことに対し、父親像の方は質問紙では母親像より明確に否定的認識を示し、家族画では非交流という特徴のみを示した。H群にとっての父親は、否定的な関係像を意識化することへの内的葛藤が少ない、馴染みの薄い存在との可能性が考えられる。つまり、H群においては、母親との関係像からは、新たな関係へと探索を広げる基盤になりにくい不安定さが、また、父親との関係像からは、母親との不安定な関係基盤を補うために十分な応答が質、量ともに得られていないことが伺える。受容的な親の存在体験の希薄さは、ウチからソトに世界を広げる青年期において、自己調節的に対人関係を育むための安心感を内的に有していない状態の表われと考えられる。

### 対人恐怖心性と愛着不安定型

対人恐怖心性は、現在の一般的な対人関係に不安や緊張を認識する心性である。このような心性の高低と認知レベル・投影レベルで表出された親子関係像とに有意な関連が認められたことにより、対人恐怖心性を、不安定な愛着関係を基型とするIWMの観点で捉える妥当性が示された。

本研究では、対人情報処理の個人差として対人恐怖心性を取り上げた。この対人恐怖心性と、これまでの愛着研究で成人の対人関係を捉える指標とされていた対人スタイルの各特性(安定、アンビバレント、回避)とを比較考察する。対人スタイルの不安定型には、安心感

を脅かす対人関係や対人情報から距離をとる回避特性と、他者として安心感が得られないため一層他者にしがみつくとアンビバレント特性とがある。我執性と没我性といった対立葛藤(内沼, 1977)をもちながら自他関係にとらわれる対人恐怖心性は、アンビバレント特性との類似が予測できる。対人スタイルと母親関係認識との関連を検討した久保田(1995)の結果では、対人スタイルの回避特性は母親との関係認識の愛着因子とのみ負の相関を示しており、対人スタイルのアンビバレント特性は母親との関係認識の愛着因子と負の相関を示し、不信、過剰適応、分離不安因子とは正の相関を示した。母親との関係の否定的な認識と有意な関連があったことにより、対人恐怖心性は回避特性よりアンビバレント特性と類似しているといえる。しかし対人恐怖心性は、アンビバレント特性のように、母親との関係の肯定的な認識は有意に低くなかった。対人恐怖心性は、愛着のアンビバレントと類似しているがアンビバレントでは説明しきれない心性であり、愛着の不安定型として位置づけ、その構造をより明確化していくことが今後必要と思われる。

### 今後の課題

なお本研究は、対人恐怖心性或親子関係といったテーマに描画を伴う青年にとって負担の大きい課題であり、これを郵送による回収法で実施したためにあまり高い回収率を得られなかったという限界を考慮しなくてはならない。回答を得られなかった者の中には、こうした課題への接近を回避しようとする心性が含まれていた可能性が考えられる。愛着にまつわる情報への接近容易性は、IWMの安定性に関わる主要な次元である。本研究ではこの次元の統制が不十分であったため、愛着や対人情報への接近が比較的容易であった回答者群の中で、対人恐怖心性と親子関係像の関連が認められたという可能性を否定できない。こうした課題に取り組む姿勢の差異もデータとして扱えるよう、今後はより慎重な計画が必要と思われる。

愛着理論は、いわゆる正常者の発達過程でも起こり得る微細な応答性のずれから生じる関係性の問題を観察した理論であり、様々な対人不適応を正常との連続線上で説明しうるものと思われる。それは、過去の経験が決定的にその後の人格構造を規定するという考えではなく、過去の体験的知識が内在化され、現在の情報を処理する際に表象モデルとして機能するということを意味している。愛着対象との関係についてのIWMは、あらゆる対人情報処理に中心的な影響を及ぼしやすと考えられているが、新たな体験によりIWMが更新

されていくことも考えられている(Bowlby, 1988)。今後はさらに、対人恐怖心性の予後と、それに伴う親子関係像の変化、それに果たした要因などを明らかにし、IWMの変容可能性をも視野に入れて、臨床場面への応用可能性を検討することが課題である。

### 引用文献

- ボウルビィ J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳) 1977 母子関係の理論II分離不安 岩崎学術出版社 (Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss: Vol.2. Separation*. New York: Basic Books.)
- Bowlby, J. 1988 *A secure base: clinical applications of attachment theory*. London: Routledge.
- バーンズ R.C.・カウフマン S.H. 加藤孝正・伊倉日出一・久保義和(訳) 1975 子どもの家族画診断黎明書房 (Burns, R.C., & Kaufman, S.H. 1972 *Actions, styles and symbols in Kinetic Family Drawings (KFD): An interpretative manual*. BrunnerMazel.)
- 土居健郎 1971 甘えの構造 弘文堂
- 繁多 進 1987 愛着の発達 母と子の心の結びつき 大日本図書
- Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511—524.
- 日比裕泰 1986 動的家族画(KFD)一家族画による人格理解— ナカニシヤ出版
- 笠原 嘉 1972 正視恐怖・体臭恐怖 医学書院
- 木村法子 1983 対人恐怖についての一考察—TATに表された自己と他者を通して— 京都大学教育学部紀要, **29**, 134—144.
- 久保田まり 1995 アタッチメントの研究: 内的ワーキングモデルの形成と発達 川島書店
- 松井三枝 1990 対人不安と対自他認知体系—Self-identity Systemの検討— 心理学研究, **61**, 94—102.
- 永井 徹 1994 対人恐怖の心理—対人関係の悩みの分析—サイエンス社
- 小川捷之 1974 いわゆる対人恐怖症者における「悩み」の構造に関する研究 横浜国立大学紀要, **14**, 1—33.
- 大橋秀夫 1983 鬼と世間と人見知り 青年心理, **41**, 52—61.
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た成人の対人態度～成人版愛着スタイル尺度作成の試み～ 東京都立大学人文学報, **196**, 1—16.
- 内沼幸雄 1977 対人恐怖の人間学—恥・罪・善悪の彼岸— 弘文堂

### 付 記

本論文は、日本教育心理学会第36回総会での発表を、再分析し加筆・修正したものです。御指導頂きました京都大学教育学部教授斎藤久美子先生(現 甲子園大学)に深く感謝いたします。

(1998.11.17 受稿, 2000.1.17 受理)

## *Anthropophobic Tendencies and Cognitive-Projective Images of Parent-Child Relations*

MEGUMI KUBO (SHITENNOJI INTERNATIONAL BUDDHIST UNIVERSITY) *JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY*, 2000, 48, 182—191

The present study examined the relation between anthropophobic tendencies and internal images of parent-child relationships from the viewpoint of internal working models. Images of parent-child relations were assessed both on the cognitive level and also on a projective level for the purpose of accessing internalized experiences. On the basis of scores on an anthropophobic-tendency questionnaire, 40 high scorers (H group) and 39 low scorers (L group) were selected from 153 university students, and the results from a questionnaire on parent-child relations and a kinetic family drawing recollection method were compared. On the questionnaire, the high group showed higher scores on distrust toward their mothers, while showing the same high scores on intimacy as the low group. The high group showed lower intimacy toward their fathers, and higher distrust and fear scores. In their family drawings, the high group expressed more difficulty communicating with their parents. It was suggested that (1) the high group's images of parent-child relations do not consist of positive elements, and (2) the high group did not have enough experience being with acceptable parents. The discussion suggested that anthropophobic tendencies are related to insecure internalized images of parent-child relations, which function as a basic pattern for interpersonal relationships.

Key Words : anthropophobic tendencies, images of parent-child relations, attachment, internal working models, university students